あなたを認めない。

nishi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あなたを認めない。

【Ｎコード】
Ｎ１３５４Ｈ

【作者名】
ｎｉｓｈｉ

【あらすじ】
エディーガは華やかな男だ。王位継承権に最も近く、才に溢れた魅力ある青年だ。欠点があるとすれば、派手な女性関係。多くの人間が彼の妃にと、娘や縁者を送り込むが。部下であるキィーリスにとってそれらは理解しがたい行動である。大切な身内は絶対に近づけたくない。そうじゃないだろうか。姉上を嫁がせるなんて、もってのほか。絶対認めないね、あんな男。

1.

懐かしい夢を見た。

銀色の睫毛が小さく痙攣して、うっすらと瞳がのぞく。
死人か蝋人形のようにぴくりとも動かず眠っていた男は、仰臥したまま夢を思い返した。

「？」

そばの机で書類にペンを走らせていたエディーガは僅かな空気の動きに敏感に反応した。

「起きたか？キィーリス。珍しいな、お前が仕事中に寝るなんて。」

寝ざめが悪い。

届いた声に、キィーリスは瞬時に眉根を寄せた。
カウチに転がったままの視界に映るのは、眠る前に仰いだ城の天井ほかならない。

ゆっくりと、声のした机の方向へ顔をずらすと見慣れた顔があった。
夢見が悪かったかと思えば、目覚めた瞬間彼の声。
なおかつ、とどめといわんばかりに、面白そうにこちらを伺う顔。

最悪だ。

『目覚めてエディーガ様の顔を見れるなんて、なんてうらやましい。』
どこかの令嬢が、正気を疑う台詞を吐いていたが
やはり、気分が悪い以外に言葉が見つからない。
なまじ顔の造作がいいと、こんな性質の悪そうな笑みですら、愛を夢見る対象になるとは。
なんて、嘆かわしい。
「…不愉快だ」
思わず口を出た言葉に、相手はひょいと眉をあげる
「夢見が悪かったか？」
「…いえ、」
目を覆った手をおろし、エディーガにに向き直る。
交差する視線を厭うように、キィーリスが視線を落とすとエディーガの手元にぴたりととまる。
彼の手にある書類が、仮眠をとる前机に放り出したものであることに気づきくと重い溜息をついた。
本当は嫌いになりたいのに、嫌いになりきれないのは、彼のこういうところだ。
「失礼いたしました。…殿下」

殊勝な言葉を選んでみせたものの、カウチの背もたれに体を預けたままで「しかし」と不遜な態度で続ける。

眠気のかけらも見られない鋭い眼光で相手を見据え

「しかし、一言言わせていただけるなら私の睡眠不足はあなたのせいです。殿下」

夜な夜な遊び呆ける第一王位後継者の護衛としりぬぐいを。言葉にならない皮肉に。エディーガはにやりと笑って返す

「部下の居眠りを黙って許してやろうというのに」

くつくつ笑って。小さい声で続ける。

「それとキィーリス、そんな台詞を吐いたら侍女達にお前との関係まで邪推されるからよせ」

ついでとばかりに、わざわざ近くに寄ってきて、耳元に口をよせると。

城は噂が速いんだと。ひらりと部屋の隅に控える侍女を指さす。

心底嫌そうにキィーリスの頬がゆがめられる。

女好きのエディーガを誤解するような城の人間がどこにいるだろうか。

はん、とばかりに鼻で笑い立ち上がる。

「いい加減、夜遊びをおやめになってはいかがです。」
エディーガは本気で受け取るそぶりは一切なく。小首を傾げた。
「本当に今日は機嫌が悪いな。寝ていてもいいぞ」
ふっと笑うと。言うことを聞かないやんちゃな弟を宥めるように頭をなでた。
「いいえ、不愉快な夢をましたので。今眠ると悪夢を見そうですから」
身だしなみを整えるためにカウチから離れたキィースの代わりに、クッションに沈みこみ背もたれにに頬杖をすると、きらりと目を輝かせた。
「へぇ、どんな夢だ？」

キィーリスは振り返り。
とろけるような微笑みを浮かべた。
「幼い頃のあなたとの思い出です。」

一瞬真顔で固まった。
「おまえねぇ」
エディーカは変わってしまった年下の友人の背に呟いた。
「昔も今も、いじめた覚えはないんだが？」

2.

夕刻走ってきた侍従の報告に、キィーリスは舌打ちして書類を部下に押しつけた。
まだ、明るい空を見上げて何事か悪態をつくと、城の中を駆けて上司の部屋と向かう。

入室の許可を得て、中に入るとエディーガはすでに出かける装いだ。

「今宵はどちらの姫君のもとへ？殿下」
自然低くなる声に、盛装したエディーガは肩をそびやかす

「求められれば応えるのが性分でね」

「それでしたら、私の願いも聞いていただけませんか。」

「男の願なんぞ聞いてどうする。なぁ、ディルギ」

「キィーリス様は、殿下のお体を心配なさっておりますので。ぜひ、私からも申し上げたく存じます」
静かに、そう一言だけ口を開くと。キィーリスに同情的なまなざしを向けた

「心配には及ばん。私は元気だ」
「エディーガ…人の話を…」

職務に忠実なディルギが臣下としての態度を一瞬崩し、幼い頃のように諌めかけたが。

諦め、深いため息で、キィーリスに首を振って見せた。

「・・・・。どこに行かれるのか存じませんが。おでかけになられるときは一言お願いします。」

「また、ついてくるのか。お前」

呆れたように呟いた。

その言葉に、若干疲れたようにキィーリスも頷いた

「それが、私の仕事ですから。

お願いですから、外に行かれるよりたまには娶った妃方のもとへ通っていただけませんか？

後宮であれば私も安心して、屋敷に帰れますし。殿下のお忍びの見張りなんてしたくないんですよ。」

お互いのために、お前がついてくるのをやめればいいんだよ。

堂々めぐりの言い合いに、額を押さえてキィーリスはため息をついた。

「殿下。たまには後宮へお渡りにならないとお妃様方がさびしくお過ごしですよ」

キィーリスの病んだような暗い眼差しに、ディルギも口添えする。

「まぁ、最近は確かにいっていなかったな」

行き先を後宮へと考えなおしたエディーガに、キィーリスはディルギに目で感謝を告げると。

歩きだしたエディーガについて部屋を後にした。

いつものように、言い合いをしながら後宮の門へ向かい。
入口に近づくと、キィーリスは足を止める。
何かを思うようにその奥を見つめると、歩む足を止めないエディーガに尋ねた

「それはそうと、殿下。アイリエヌ妃殿下はお元気ですか？」

一瞬首を傾げて、エディーガは頷いた。

「アイリエヌ？あぁ、ここ暫く顔も見てないな。あれは、性質がたおやか過ぎる。」

「だから、向いてないと申し上げましたのに」

溜息をついた。

「お目通り叶いませんでしょうか」
「ならん。」

当然のように、エディーガは即答する。

一度妃として上がったのだから当然のことではあるが。

「お忘れかもしれませんが、わたしは……」

アイリエヌと……。

キィーリスが越えられない、向こう側へ行ってしまったエディーガの耳にその言葉は届かなかった。

3.

『お忘れかもしれませんが…』

伝えられなかった言葉を、噛みしめた。

アイリエヌは姉である。

愛情深くキィーリスを育てたのはそう歳も変わらぬアイリエヌであった。

キィーリスが生まれて間もなく、母は亡くなり。

厳格な父に後継者としての努力を求められたキィーリスは親の愛情には恵まれたとは言い難い。

そんな弟を幼心に不憫に思ったのか、優しく世話を焼き、

キィーリスと過ごす時間を多く作る心の優しい少女だった。

領土から仕官するため、一人城へ入ったとき。

大好きな姉と離れた悲しみを上回る衝撃がキィーリスを襲った。

姉を守るためには城と言う名の、悪の巣窟で戦い抜かねばならぬのだと。

中でも、一段と華やかなエディーガ。忘れもしない。

愛らしい表情と仕草で周りの女性の関心を奪う、あの天性の女たらし。

「殿下に取られたくなくば、知られないことですね」

キィーリスが、姉に向ける愛情が深いことを知ったディルギの冗談とも言えない忠告を信じ。
存在をひた隠しに、隠すキィーリスを笑いつつも周りの従者は皆協力してくれていたのに。

「キィーリス。お前、姉がいるとなぜ教えなかった？」

ある日、天使のような微笑みを浮かべながら、無邪気に素直に詰られ、キィーリスは笑えるほど狼狽した。

「キィーリス？」

蒼白になったものの、次の瞬間心を鬼にしてエディーガの目を真っ直ぐにとらえて話した

アイリエヌの性格が悪い、見目も悪いやら。

「殿下の好みではないですね。
残念ながら政治の駒にもならない女です」

醒めた口調で、そういうキィーリスにエディーガも興味をそがれたのか。

「おまえがそこまでいうとはな。だから、今まで話にも上がらなかったのか。」

姉弟仲が悪いと数年かけ定着させ。

王にまで布石を敷き、徹底した。
だから、姉の話がタブーだと誰も話さなくなり、キィーリスも油断してしまったのだ。
あの油断が…悔やまれる。思い出しただけでギリと奥歯を噛みしめた。

ある日、ほんとに何の前触れもなくその日は訪れた。
どういう経緯でか、アイリエヌの美貌を盗み見たエディーガが後宮に迎え入れると宣言した悪夢のような日が。
怒りのあまり、いっそエディーガに剣を向けてしまおうかと、思った。
いや、今でも胸に湧き起る殺意を誤魔化している。ディルギあたりは察知しているようだが。

怒りを堪え、キィーリスが陛下に謁見を願い出たことすらエディーガは知らないだろう。
ましてや、そこで話された内容、かつて交わされた約束、キィーリスの最大の布石も。

「アイリエヌ姉上」
後宮を遠くに呟く。
お元気ですか。姉上、さびしくお過ごしではありませんか。
エディーガの興味がとうの昔にそれていることを、嬉しく思うべきか、悲しく思うべきか。

ここ最近　開かれた宴や、式典。いずれもアイリエヌは出席していない。
あまり体調もよくなければ精神状態も芳しくないと聞く。
お待ちしていますと文を送れば。是と簡潔に帰ってきた書状を開いた。
次の機会はきっとアイリエヌは出席する。弟のために、家のために。
陛下よりもはるかに規模の大きなエディーガの女宮、決して平穏な場所ではなく
怪我人がたびたび出ることもあれば、公にはされない不審な死人も出ると聞く。
そんな場所でアイリエヌが楽しい時を過ごしているとは思えない。
「姉上、そこから出して差し上げたい。」
昏い瞳を伏せて、キィーリスは宮に背を向けた。

4.

後宮に住む女人のために宴はたびたび催される。
正妃や側室が華やかに場を飾る中、キィーリスはアイリエヌだけを見つめる。

端正なその面差しに媚びた目がちらりちらりと向うが全く見向きもせず。
キィーリスはアイリエヌの傍に近づいた。

「姉上？」
「……キィーリス？まぁ、……元気にしていて？」

どこかぼんやりとした、姉の言葉に心配そうに首をかしげた

「アイリエヌ姉上？御加減が？」

傍らの侍女を見ると、小さく頷いた。
アイリエヌに視線を戻すと首を振って訴える。
「いいえ、キィーリスに会えたんですもの。…会いたかったわ。」

キィーリスの瞳が揺れた。ゆっくりと椅子まで誘いアイリエヌを座らせる。

「お父様はお元気？」
「相変わらずです、あなたのことばかり気にしています」

気持ちを隠すように柔らかく微笑して最近の父のことや領地のこと

をさりげなく話す。

「まぁ」

ひっそりと、小さな笑みを作るだけの姉に不安を大きくする。

柔らかく笑う人ではあったが、覇気のないこんな弱弱しい笑みをつくる人ではなかった。

心の伴わない、いや、心がついていかない微笑を浮かべる姉上ではなかったのに。

「昔も今も父はあなたが可愛くて仕方がないのだから。

何かありましたら申しつけてくださいね。」

アイリエヌは少し考えるように、瞳を伏せ言葉を探した。

「…お父様はあなたに厳しかったけれど、あなたのことが大好きでしてよ。」

キィーリスも苦笑した。

「ええ。存じてます。姉上が私に優しくしてくださるから、安心して父上は私を厳しく育てることができたのだと、ハスティから聞きました」

「まぁ、懐かしい名前」

緩やかに瞳を伏せたアイリエヌに不安そうにキィーリスは言葉を重ねる。

「姉上、不自由はございませんか？」

「ええ、大丈夫よ。キィーリスもお父様も贈り物が多すぎるわ」

小さな微笑に、きゅっと姉の手を思わず握る

「姉上が我がままをおっしゃらないので、父上も私も不満なのです。」

「……。ええ、大好きよキィーリス」

キィーリスも何も言えずにいると。ふとアイリエヌが視線を煌びやかな宴に戻す。

視線を追うと、一段と大きな輪乱れ、その中心からエディーガが真っ直ぐにこちらへやってくるところであった。

「キィーリス、人の妃に手を出すんじゃない」

笑いを含んだエディーガの声、追随する周りの声にアイリエヌの表情が翳る。

キィーリスも、無表情になる。

「アイリエヌか」

つかつかと、前に立つとアイリエヌの顎をついとつかむと。

エディーガはその腕にアイリエヌを抱き込む

「殿下！」

キィーリスの切羽詰まった声に、エディーガは片眉をあげる

「戻るぞ」

アイリエヌの色を失った顔と、宴の変化した空気にキィーリスの顔が変わる。

「殿下…！」

「うるさい」

引きずるように、アイリエヌを伴って広間を出ていくのをキィーリスはこぶしを握りしめ
蒼白に見送る

「姉上…」

そのキィーリスに声をかけたものがいる。

「あなた…、今日の殿下のお相手はわたくしでしたのよ?」

高飛車なその言葉に、見向きもしない。
エディーガが後宮にいれた、高級娼婦など興味もない。

5.

一睡もできず、祈るように過ごしたキィーリスの神経質な様子とは対照的に、
エディーガの朝は緩やかに流れていた。
事実、エディーガにとって昨夜のことは大した出来事ではなく、覚えていない可能性の方が高い。

キィーリスはため息をついて、外を眺める。
ミスを繰り返し仕事が手につかなかった。
アイリエヌに出した文に返事がなく、
昼過ぎ、侍女からアイリエヌの体調がだいぶ悪いことを知らされた。

返事がないまま、数日が経ち。
キィーリス表情が暗く翳りはじめ、様々な憶測が飛び交い始めた。

報告だけがキィーリスのもとに届く日が続いたある日

「なんだと！？」

受け取った報告書を握りしめ、血相を変えて、キィーリスは駆けた。
近くにいたディルギがすぐ後を追いかけた。

「アイリエヌ姉上は！？」

後宮の入口で待っていた侍女を締め上げんばかりに問い詰める。

「…アイリエヌ様は…、心を壊されて……」

キィーリスの剣幕のせいか、言葉に詰まり泣きだす侍女を振り捨て、衝動のままに後宮へ走り出そうとするキィーリスに、兵は咄嗟に封鎖を強化する

「キィーリス様！ここから先は！」

「お気持ちはわかりますが。いったん許可をおとりになってから…！」

ぎらりと睨み、封鎖された槍を奪い逆に殴りかかろうとした、キィーリスを

後ろから追いかけてきたディルギも抑え込んだ。

「キィーリス様、立場をわきまえなさい」

……アイリエヌ姉上……。

放り出された槍に、尻餅をついた兵に目をやることもなく。

塞がれた扉をきつくこぶしで殴りつけると、ディルギを振り払いキィーリスは体を翻した。

数刻後。

優雅なお茶を楽しんでいたエディーガは、
キィーリスを迎え入れることとなる。

「殿下」
エディーガは華やかな笑顔を向ける
「なんだ、キィーリス。暗いじゃないか」

相変わらずの夜遊びが続き、一向にどこかに落ち着くそぶりもない。

「……。お願いが、ございます。」

一枚の書類を差し出す。
真っ青な顔だ。

「なんだ？」
怪訝そうにちらりとそれに目をやる。

「アイリエヌ様の里帰りの許可をいただきたいのです。だいぶ御気分がすぐれずに」

少し、首をかしげエディーガが合点がいったように頷く

「あぁ、アイリエヌか。なんだ、具合が悪かったのか」
「はい。できるだけ早急に。」

つまらなそうに、その紙を眺めキィーリスの顔に視線を戻す。

「里帰りはならん。」
「殿下！」

キィーリスの激情に眉根を寄せる。
「おまえね、何年その職をやっている？
そうそう、簡単に返せるものではないとわかっているだろうに。
懐妊したわけでもなく。下賜するわけでもなく」
ぴくりと、キィーリスの眉があがる。
「ですがっ！」
「後宮をでて、西の塔に部屋を設ける。一時そこで養生すればいいだろう」
その譲歩に顔を伏せて、ええと、頷く。
「あぁ、やけに気にすると思えば。あれはお前の姉であったな」
零れるような言葉に、瞠目する
「ええ、姉でございます。」
「殿下。見舞いに西の塔へ入る許可を頂けますでしょうか」
「よい」
キィーリスは頷くと、部屋を出る
エディーガは不思議そうな顔をする。
「ディルギ……、あれのあんなに感情的な顔を見たのは始めてな気がする。」

「キィーリス様は、家族思いでいらっしゃいますから」
「そうか？昔はさんざん姉の悪口を言っていた気がするが」
ディルギは苦笑して何も語らなかった。

6.

「姉上？……姉上？」

私がおわかりになりませんか？
西の塔に移されたアイリエヌの傍でキィーリスは必死に言葉を紡ぐ。

「どうして……」

どうして、こんなことに。
最後に別れた日のことが目に浮かぶ、エディーガに連れ出され、顔色を失った彼女。
宴で一目見た瞬間、アイリエヌの意識がすでに現から離れはじめていることを知っていたはずなのに。
朧げな危うい世界を見るように見つめられ、胸がざわめいた。あの、衝撃。

嫌な予感ほど、よくあたるから

『ア…リ…！…様は…心が壊れて……』

耳を抑えても、記憶が甦り、侍女の言葉も責めるように追いかけてくる。
あぁ、姉上。誰も、弟のわたくしもあなたの瞳に入らないのですか？

問いかけにも、刺激にも一切答えずに。
人形のように虚ろなアイリエヌにキィーリスは涙を流した。

悲しみなのか、怒りなのかそれすらわからないままにはらはらと伝う涙。
将来有望な騎士として、側近として知られるキィーリスの硬い表情はない。

どうすれば、この気持ちを言葉であらわせるのだろう。

幼い時分、流れ落ちた涙を拭いて抱きしめてくれた姉が今は、呼吸をするだけ。
キィーリスは顔を覆って声をころした

「……ア…ィ…ヌ…姉上……」

そっと、その手を握りしめる。
後宮に入って痩せ衰え、からだを壊していったアイリエヌ。
体力がないのはわかっている。

「姉上、家に帰して差し上げましょう」

細い手を両手で握りしめて額に当て、誓う。
瞳が昏く危うく輝き、微笑する。

約束します。

あなたが幸せに暮らした領地に。

表情を返さない姉の瞳に囁いた。

「もうしばらくお待ちください」

日が暮れ、月が昇るまで

跪いたまま、姉の手を額に押戴いていた。

心が揺らぐことのないように、決心を固めてこの部屋へ戻ってくるために。

7.

キィーリスが見舞いに行ったまま戻らない。
ディルギは表情を動かすことなくエディーガの横でその報告を聞いていた。

…馬鹿なことを考えなければよいが…。

夕刻、西の塔へ立ち寄りまだキィーリスが出てこないことを聞くと眉根を寄せた。

夜も更けたころ。
聞き慣れた規則正しい足音がゆっくりと下りてくるのを拾うと、一息ついて壁にもたれていた上体を起こした。

「キィーリス様、お待ち申し上げておりました。」

立ち止まったまま、言葉の出てこないキィーリスに、ディルギはふっ、と苦笑した。

「……キィーリス」
敬称を抜いた、そして柔らかい呼び声にキィーリスがのろのろ顔を上げると
ディルギの労りを含んだ目とぶつかる。

「久々に、先輩として、友人として言っておいた方が良いかと思ったんだが。」
「……ディルギ。」

困ったように、億劫そうに　緩やかに首をふる。
その反応をどう捉えればよいのやら、首を僅かに傾けて間を置く。

「……。アイリエヌ様は…、気の毒だが。
エディーガの馬鹿は、あれが王太子である限りどうすることもできない。」

『だから、ことを荒立てるんじゃない』
ディルギの言葉にしない声が聞こえてくる気がした。
確かに、エディーガは王家の人間、キィーリスは一介の臣下。
だが、

「……、あなたなら、出来たのではないですか。ディルギ」
「許してやってくれないか。」

キィーリスの淡々とした声と。
ディルギの強い言葉が重なる。

二人の目が真っ直ぐにぶつかりあった。

キィーリスはひっそりと嗤った。

「ディルギ様、あなたのお立場であれば出来たのではありませんか？」

「……。
私は、……殿下のただの従兄にすぎない」

ディルギは反論を許さず強く、言い切る。
キィーリスは吐息をついて銀色の睫毛を伏せた。
「その、殿下は今どちらに？」
かすれた声が、既に敬意を失っている。
「さて……」
キィーリスも察しているだろうが。
ディルギは、苦い気持ちで月を見上げる。
エディーガ、あなたの知らない間に事態は動くようですよ。
頭の痛い思いで、思いおこす。
『……。殿下、今宵は？』
批難の響きに一切頓着せず、
『街におりる。ディルギ、お前もつきあえ』
笑顔で言い放ったあの従弟。
羽を広げる開放感にあふれている。
優秀な、とても優秀な王太子であるのに。

馬鹿な子を愛しく見守るような、そんな表情を一瞬浮かべた。

通らないことを承知で意見した。

『今宵は、おやめになった方が良いかと……』

『なんだ、キィーリスがいないのにお前まで』

自由な魂の王子は、既に部屋の外へ飛び出していた。

その先にどんな未来が待つかも知らずに。

8.

「陛下」

拝謁を願い出たエディーガの第一騎士を勤める青年を、
年齢よりだいぶ老いた王が見下ろす。

「来たか。キィーリス……。」

かつて、同じ謁見の間でこの日が来ることを恐れていたことがあった。
頭を下げたまま、微動だにしないキィーリスという若い騎士。

「エディーガ筆頭騎士……。」
呼びかけて、王はふと口もとの皺を深くして笑った。

「御前試合優勝騎士キィーリス。王の騎士。……私の騎士。」

息子エディーガの側近として仕えてはいるが、
王であるディゲールに剣を捧げ誓った男。いや、契約した男。

「頭を上げよ。」

キィーリスがゆっくりと上体を起こす。

「少し、痩せたか」

案じるような声音。

息子の側近として重用した、信用できる腹心の男である。
そして、臣下としてだけでなく。
エディーガの弟のように、自分の息子のようにその成長を眺めてきた。

珍しく、憂いを帯びた瞳が見上げる。

「いえ。陛下。」

言葉を取り繕う必要も感じず、キィーリスは一言尋ねる。

「……約束を覚えておいでですか。」

キィーリスの言葉にゆっくりと頷いた。
情報はより細かく入っている。そして、彼が動くのも時間の問題だろうと思っていた。

「エディーガか。苦労をかけるな。」

キィーリスは、苦笑する。

「陛下に捧げた剣に誓って、約定を違えることはございません。」

微笑んだ。

どうか、御許可を。

「許す。しかし、契約を破棄した場合は」

……、王とてキィーリスが裏切るなどと微塵も思っていない。
王とキィーリスの間にあるのは絶対の信頼だ。

「エディーガ殿下を傷つけることはございませんし。
姉上の命も父の命も領民も差し出す気はございません。」

互いの大切なものを守る確固たる信念、姿勢を理解している。

「勝算はあるのか？」

薄く笑って答える。

「はい、陛下。必ずや」

小さく頷いて、堂々とこちらを射抜く視線。
実力の伴う自信に溢れた目だ。

「しかし、多少物騒なことになってもお許しください」

「…何をする気だ？」
貫禄を持って見下ろしても、揺らぐことのない瞳。

「諫言を…。より、殿下の心に届くように」
「あれは資質はある。お前の言葉によって少し態度を改めるようになれば

なおよい君主となるだろう」

エディーガが、ラオギネル伯爵家の令嬢アイリエヌをも正妃に迎えると言った時から。
この日が来ることを予想していた。

辞めておけと、言っても聞く気のないエディーガと、
婚儀の中止を願い出た、ラオギネル伯爵の息子たるキィーリス。

ラオギネル家の恐ろしさをあの息子はいまだ知らないだろう。
後継ぎとして、能力も人格も自分の息子ながらほぼ認めている。
難点は、エディーガの艶聞と素行……。

9（前書き）

久しぶりです。

9

城内が寝静まる真夜中まで仕事に拘束され、若干その美貌に疲労の影を落としたエディーガは、
部屋を出て外門へつながる回廊へと足を向けた瞬間行く手を阻まれた。

追って部屋から出たはずのキィーリスが回り込んで立ち塞がっている。
「キィーリス」
険のある声音に負けじとキィーリスも
棒読みのごとく、幾度となく繰り返された台詞を返す。
「エディーガ様の宮はあちらでございますが。」
反対側の回廊を指で示す。

「お部屋までお送りします」
無言のエディーガとしばし瞳を合わせ無言の攻防が続いたが。
キィーリスが目を伏せた
「……と申し上げたいのですが。殿下にお願いがございます。
今宵、会っていただきたい方がおります。」

深く頭を下げたキィーリスに、間髪おかずエディーガの手が乗る。
「おまえが手引きをするとは珍しい。いいだろう。」
簡単に頷くエディーガに、頭をあげたキィーリスも僅かに眉を動かし
何か言いかけるように口が開いた。
「殿下」

揚々と先に歩きだすエディーガの背を見て、吐息を漏らした。
大抵の者は深い眠りに入っている時間。
案内するためにキィーリスが先に立ち、そのあとをエディーガはゆったりと歩き
最小の配備すら姿を消した、静かすぎる回廊へちらりと目をやる。
西の塔へ向けて続く道だけ、最小限の明かりが灯され。
後は月の清らかな明かりが照らすだけ。

足音が冷たく響く石の回廊を、キィーリスが先導する。

西館の庭園の香りが立ち込め、静かな庭園の中心。
辿りついたところでキィーリスが足を止める。
庭の中心は開けており、茶会を開くための石畳や少し上段には東屋もある。

一つだけ不自然に置かれた椅子を見つけて
女人かとエディーガが見当をつけたころ。

キィーリスが振り返る

「殿下お分かりになりませんか？」
「なんだ？」

諦めたようにキィーリスはエディーガの後ろへ視線を向ける

「もう、来るようですね」

エディーガの後ろ、塔に続く道の向こうから人影が近づいてくる。

「ディルギ」

静かに呼べば
その腕に一人抱きかかえ、顔が判別できるほどに近づいてきた。

「静かな夜ですね。」

穏やかな声でキィーリスが囁いた。
エディーガの耳の傍で。

静かな夜。

刀身が鞘から抜ける音がはっきりと耳に残るような。

「キィーリス！」
緊張を孕んだディルギの低い怒声にも、
彼の腕の中に抱えられた人間は反応ひとつ返さず。
衝撃でだらりと落ちた手が揺れていた。

「キィーリス…？」
いくら陛下の気に入りといえども、抜刀まで許容するほど王は甘くはない。
ディルギの内心の焦りを気にも留めず、キィーリスはエディーガに刃を突き付けたまま。

『殿下』
低く響く声。

エディーガは……、不可解だと言わんばかりに。
首に添えられたむき出しの刀身に目を落とした

「なんだ？」

平常と変わらない声音に、キィーリスは嗤った。
その笑みに、ディルギはキィーリスの決意を確信した。

……、馬鹿な従弟。可哀そうなキィーリス。
ディルギは憐れむように二人を見、腕の中で身動きすらしないアイリエヌを見下ろした。

「姉上を、その椅子に座らせて頂けないでしょうか。ディルギ」

用意された椅子にディルギは丁重にアイリエヌをおろした。

エディーガの目が一瞬空を見つめ、アイリエヌを見る。

「アイリエヌ……」
「……。ようやく、お気づきですか」

キィーリスがぽつりとこぼす。

「何がしたい。キィー……」
「殿下。」

小さな声に相手を黙らせる、強い意志がこめられていた。

ディルギの背筋をぞくりと寒気が走る。

この瞬間、キィーリスが何をしたいのか、ディルギは正しく理解したと思った。

今宵の人払いの意味も、近衛兵しか通路に配置されていなかったことも。

そして、異例の王命の発令

“今宵の出来事に、全ての者手出し無用”

それらの全てが何を指しているか。

止める権利は自分にはない。

見下ろしたアイリエヌは。

まるで人形のように座っているだけであった。

「瞳に映る現実から目を反らすほど、弱かったですか。貴女は」

止める権利があるとしたら、アイリエヌ様。貴女だけです。

9（後書き）

忘れていたわけではないですが。
久しぶりです。うっかり一度消してしまったら勢いが。
しばらくまた更新できそうにありませんが。駄文を読んでいただき
ありがとうございます。

10.

「王族に、刃を向けたものの末路は解っているな。キィーリス」
躊躇なくエディーガの手が帯刀した腰に伸びる。
「無駄です。貴方が抜刀するより、私が速い。」
一言で切り捨て、余裕を見せる。
実力は、数年来の付き合い、互いに解らないはずがない。
ままならない状況に、ちらりとディルギに向かったエディーガの瞳を見て
キィーリスは静かに告げる
「ディルギは手出しはいたしません。
殿下こそ、お解りでしょう？城のこの状況。
私だけでは貴方を弑する機会を作るなど不可能。陛下のご意思無くしてあり得ない」
「……っ！　陛下の…、と言ったか？」
エディーガが目を見開く
「ええ。」
幼子を見るかのように、優しく。あるいは憐れむかのように、柔らかく。
甚振るかのように、ゆっくり。キィーリスは応える。

「ディルギ。
今日の触れを殿下はご存知でない。お伝えいただけますか。」
「……」
無言ながら、ディルギのまっすぐな視線がキィーリスを貫く。
視線に揺らぐことなく、キィーリスは口角をあげ応え。エディーガは眉根を寄せた
「ディルギ、言えっ」
「“今宵の出来事に、全ての者手出し無用”と」
ディルギは瞑目した。
エディーガの瞳が一瞬力を、失い、次の瞬間烈々と怒りで満たされた
「どういうことだ。それは。」
決して大きくはないその声に、深い怒りを見出しキィーリスは暗く笑んだ。
常に王位継承者として余裕のあるエディーガが崩れた。
王命で、第一位王位継承者のエディーガの安全を脅かす事態が起こりうるはずが無い。
しかし、それを　事実無根の出鱈目だとエディーガが信じきれないということは…。
「御存じなのではありませんか」
キィーリスは笑う

「正統なる王位継承者」

その言葉に、エディーガの肩がぴくりっと動き、ディルギを瞬間見やる。

エディーガの前では誰もはっきりと口にしない、いや触れられることのない話。

それでも、エディーガはその話をやはり知っている。

緊迫した空気の中、キィーリスだけが異質に嗤う。

エディーガは低い声でキィーリスに問う

「私が正統な王位継承者ではないと、主に剣を向けるのか、キィーリス」

いえ、とキィーリスは首を振る。

「殿下。重要なことを、お忘れです。」

ゆっくりと、闇が侵食する。

さらに、もっとその侵食を進めるべく、キィーリスは視線を合わせたまま、エディーガを執拗に傷つける

「私は殿下の筆頭騎士を拝命しておりますが。

貴方に、剣の誓いを捧げたわけではありません」

息をのむディルギと、顔色を失ったエディーガが無言でキィーリスを眺める

「私が剣を捧げ、私が剣を揮うのは陛下ただお一人のため。
私は『王の騎士』の称号を持つ、ディゲール陛下の騎士。
御前試合で陛下に剣を捧げたのをお二人ともご自分の目でご覧になったのでは。」

長年の信頼が、崩れ落ちる音をキィーリスは耳にした気がする
エディーガの真っ直ぐな瞳がキィーリスに切り込む。
感情を律するためか、深く息を吸い込んだエディーガは静かに問いだたした

「お前が信じる正統な血統のために私を殺すか。
それとも、姉のために、私を殺すか。そして陛下もそれを是とするか。
私を殺し、そして私の後にだれを据える気だ？」

ひやりとした刃先がエディーガの首から顎までなぞる

「私が殺すのは、私の心を…人の心を、殿下にお解りいただくため。
……殿下、私はアイリエヌ姉上を大切にしていただきたかった。
私が肉親を大切に思う気持ちを、人を大切に思う気持ちを理解できない貴方に、解ってほしいのです」

エディーガの取りあう気のない顔が、キィーリスから放たれる冷やかさとぶつかる。

「お解りになりますまい。血の濃い、従兄を。
実の兄であるディルギを、従者としてしか見れない貴方には」

エディーガの激しい感情を移す瞳が瞬間ディルギを刺す

「殿下、」
ディルギの焦った声をキィーリスは容赦なく遮る
「ディルギ。殿下はご存じのはずだ。」
暗い夜の白い月の下
「愛情を信じず、疑い。そして貴方は過ちを繰り返す。
殿下、私は貴方に知って頂きたい、貴方の母上の事、ディルギの母上の事。
貴方の後宮の妃の事……。貴方のせいで不幸になる女性の事」
エディーガの強張った顔を見てキィーリスが微笑む。
「出過ぎたことを申し上げておりますが…、これが私の願いです。」
「さて」
キィーリスが一息ついて微笑む
「キィーリスっ」
ディルギが押し殺した声で名を呼ぶ
エディーガに添えらていた刃が煌めく
「姉上っ！いつまで逃避していられるのですっ」
キィーリスが、自身に突き立てた。
エディーガの頬に、アイリエヌの膝に、ディルギの前に、

紅い鮮血が飛び散る

11.

赤い血と、匂いと
倒れるキィーリスを抱きとめると、ぬるりとした感触がして…。
なぜ、どうして。
ゆっくりと膝まづいて、視線が一瞬宙に浮く、
固まって動かないディルギ。
さらにその後ろに、
立とうとしたのか、椅子の足元に崩れ落ちたアイリエヌが蒼白な顔で
エディーガに抱き込まれたキィーリスを凝視している。
我に返りエディーガは、キィーリスに刺さった剣の柄に手をかける
「…っ！エディーガっ、ぬいては、なりません！医師をっ」
ディルギが我に返ったかのように叫ぶと駆けだした。
「キィーリス、お前なぜ」
キィーリスが僅かに瞼を震わせ、瞳を覗かせる
「殿下…。申し、訳……ありま、せん」
呼吸がおかしい
エディーガは眉をひそめ、溢れる血を止めるように、布を押しつける。
「あね、うえ……。」
吐息のような、その声に

「キィーリスっ！」
泣き声のアイリエヌが返事をする
僅かに顔を動かし、視界に姉を入れると安心したように口元が緩む。
「キィーリス、ごめんなさい。ごめんなさい、キィーリス。
わたくしが、情けないから。お願い、死んでは駄目よ」
縋るような言葉と、瞳。
あぁ、取り戻せた……。
どうせなら、姉上の笑顔が見たかったっと思いながら、キィーリスは目を閉じた。
エディーガが怒ったように名を呼ぶのと
アイリエヌの、泣き声が聞こえる。
声になったか、ならなかったか。
キィーリスの口元が動く
『殿下、申し訳ありません……』

11．（後書き）

……、お久しぶりです。前話を見て固まりました。
続きをどうしたかったんだろう。記憶に残っておりません。
とりあえず、続き考えながら書いてみました。結論出ず、短いまま投稿。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1354h/

あなたを認めない。

2011年9月18日13時07分発行